

## 4 - 15 石花海海盆における堆積盆地の変遷

### Transition of a Sedimentary Basin in Senoumi Basin Area

海上保安庁水路部

Hydrographic Department, Maritime Safety Agency

プレート境界としての駿河トラフの地殻変動を地質学的スケールで検討するため、海上保安庁水路部が昭和53年に実施した音波探査成果<sup>1)</sup>によって石花海海盆における堆積盆地の変遷を調べた。この結果、第四系・掛川層群、と推定される層は、その堆積盆地の中心を石花海堆（北堆・南堆）、すなわちトラフ側から焼津～御前崎の大陸棚側へと西へ移動させていることが分かった。

石花海海盆は駿河トラフの西側に位置し、トラフに沿って雁行する石花海堆と焼津～御前崎沖の大陸棚とによって挟まれた深さ400～800mの北に深い盆地である（第1図）。この海域の堆積層は褶曲など、受けている構造運動の違いを示す面を境にして、表層からⅠ、Ⅱ、Ⅲ層に区分することができる（第2図）。Ⅲ層は石花海海盆において曲降する構造をつくり、Ⅰ、Ⅱ層が、東側の石花海堆を構成するⅢ層に対しては尖滅ないし這いあがり、西側の大陸棚下のⅢ層に対しては這いあがりないしアバットしている。

Ⅰ、Ⅱ層の層厚分布を等層厚線図で見ると（第3、4図）、Ⅱ層は石花海北堆西側のほぼ海盆軸上に盆地状の堆積域を形成し、南部はしきい状の高まりによって東西に2分されている。これはⅢ層堆積後の構造運動を反映したものであろう。Ⅰ層の層厚は全体として海盆底を北流する海底谷の西側に厚く、特に相良沖では厚くなっている。しかし海底谷及び地すべりを起している石花海堆の斜面では局地的に薄く、表層が侵食されていることを反映している。

Ⅰ層の基底の構造等高線は、その深所が大陸棚から下りてくる斜面基部にあることを示し、現在の海底谷谷軸の線よりも西側にあつて北東-南西ないし北北東-南南西方向に雁行している（第5図）。これはⅠ層の堆積の中心を西方に移動させた地下構造を示している。

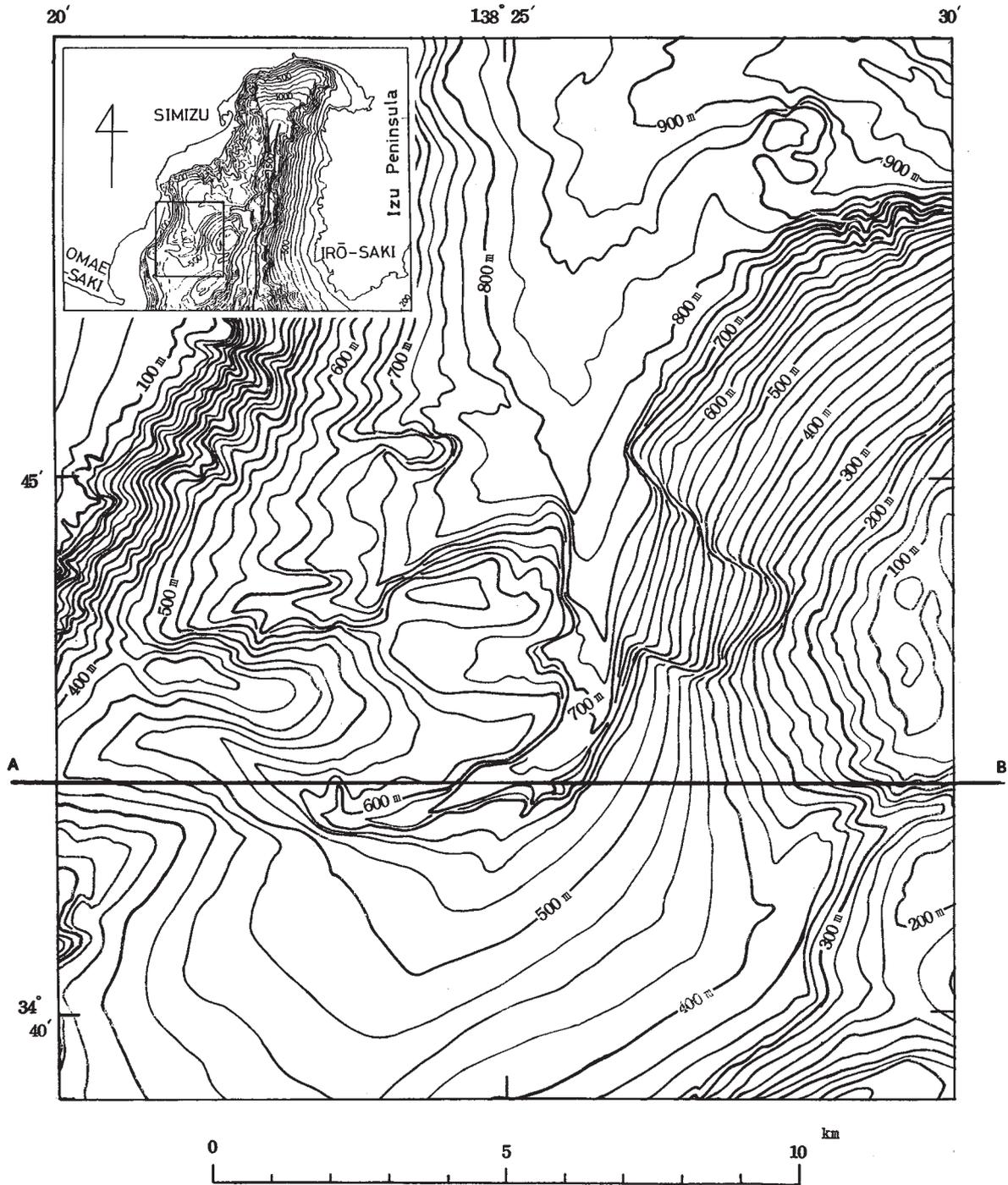
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ層はその盆地構造、褶曲構造などの特徴、石花海北堆の底質などから静岡地方陸域の第四系、掛川層群、相良層群に対比されると推定している。

以上のことから石花海海盆海域では相良層群堆積後、石花海北堆の上昇、海盆の沈降という相対的な運動とともにⅡ層、Ⅰ層の堆積盆地の中心が順次、西へ移動したことを示している。

（桜井 操・小川正泰）

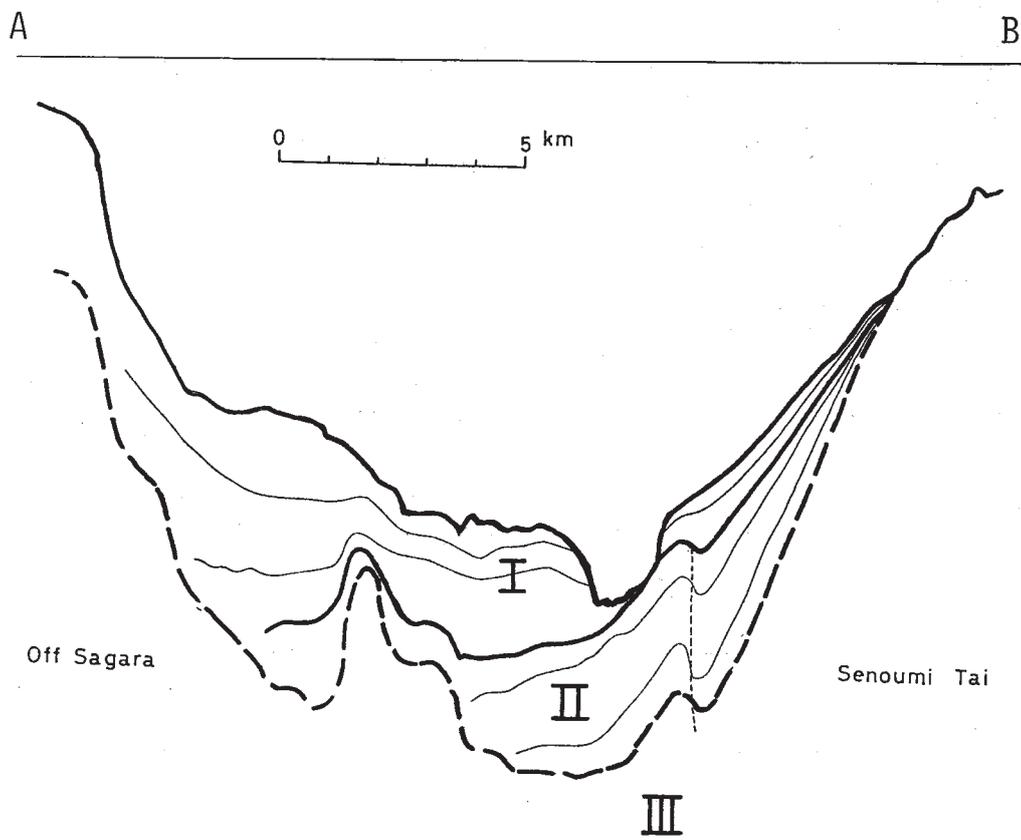
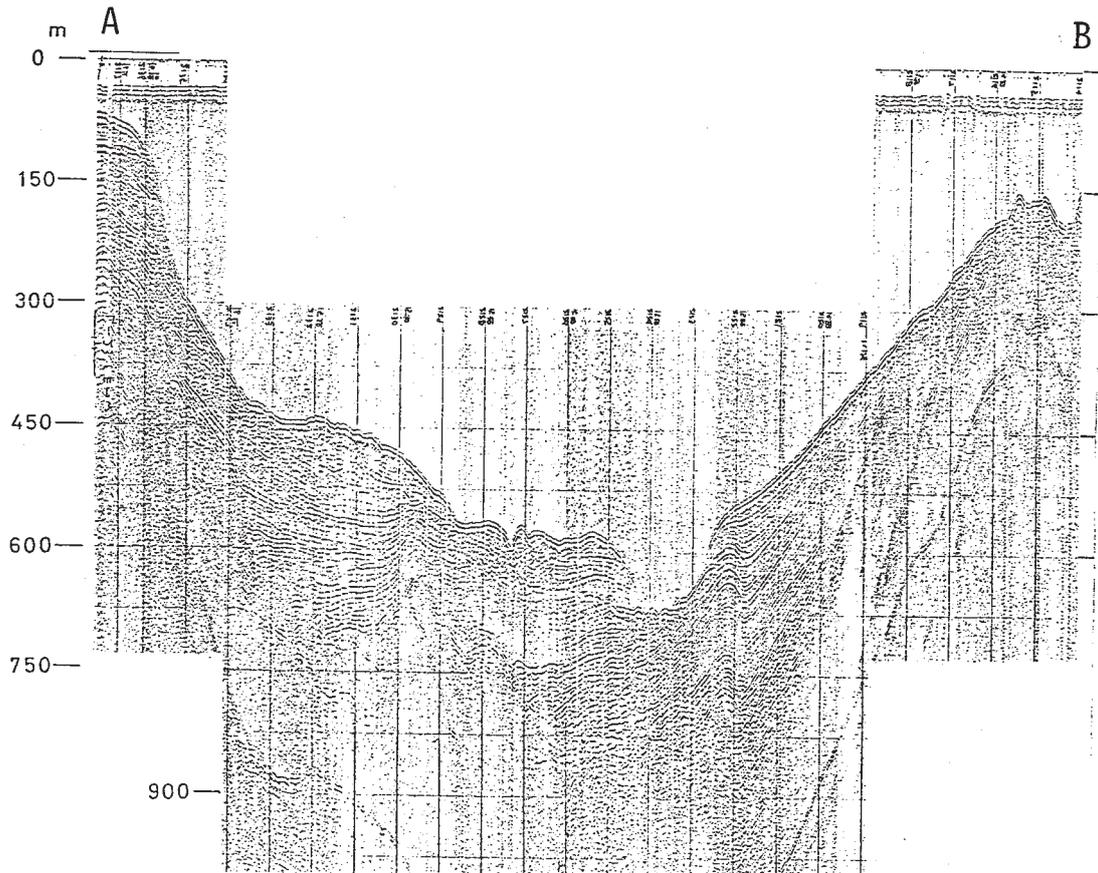
参 考 文 献

- 1) 海上保安庁水路部：駿河湾南部の海底地形・地質構造について，連絡会報，23（1980），77 - 79.

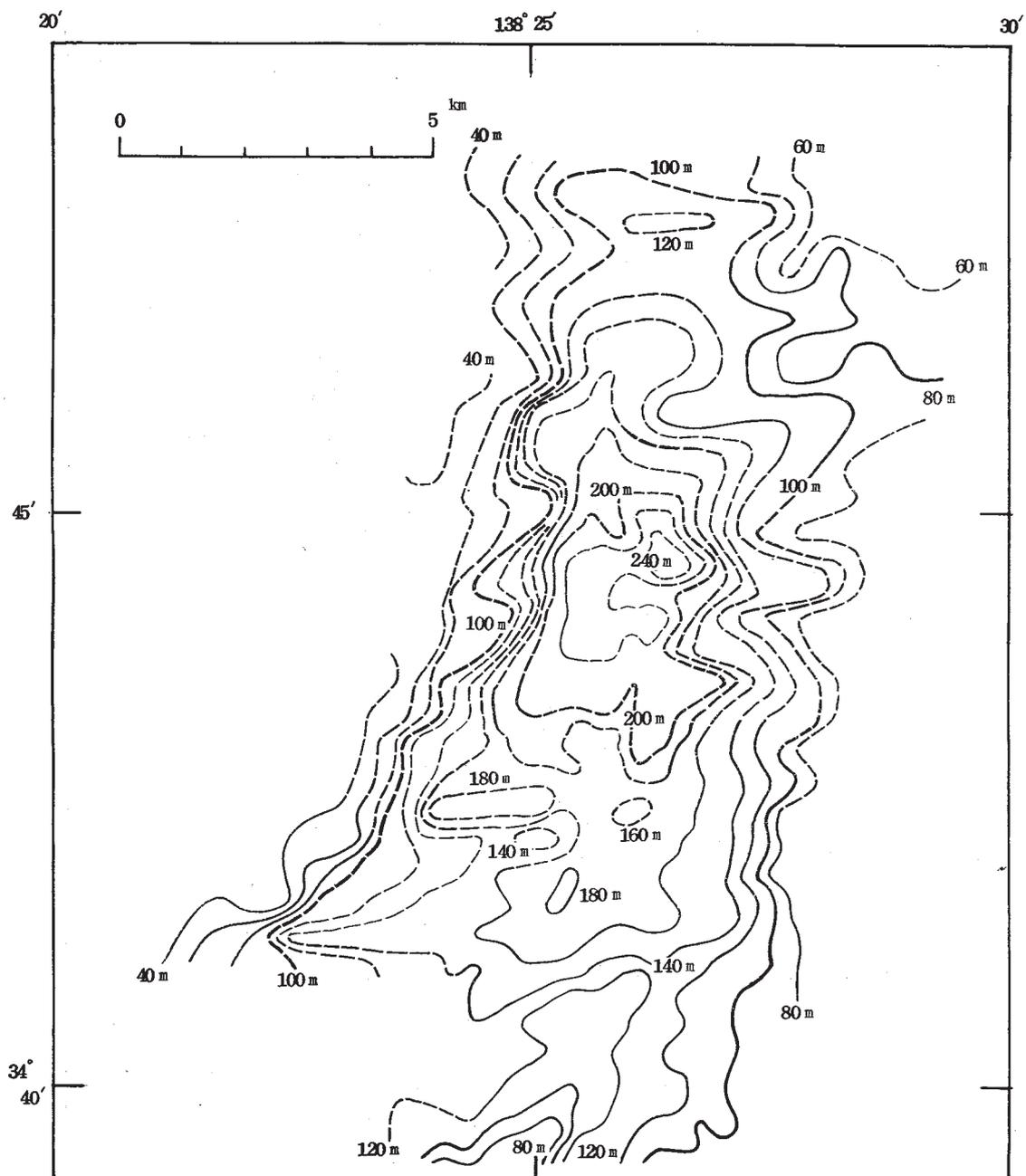


第1図 石花海海盆の海底地形

Fig. 1 Bottom Topography of Senoumi Basin.

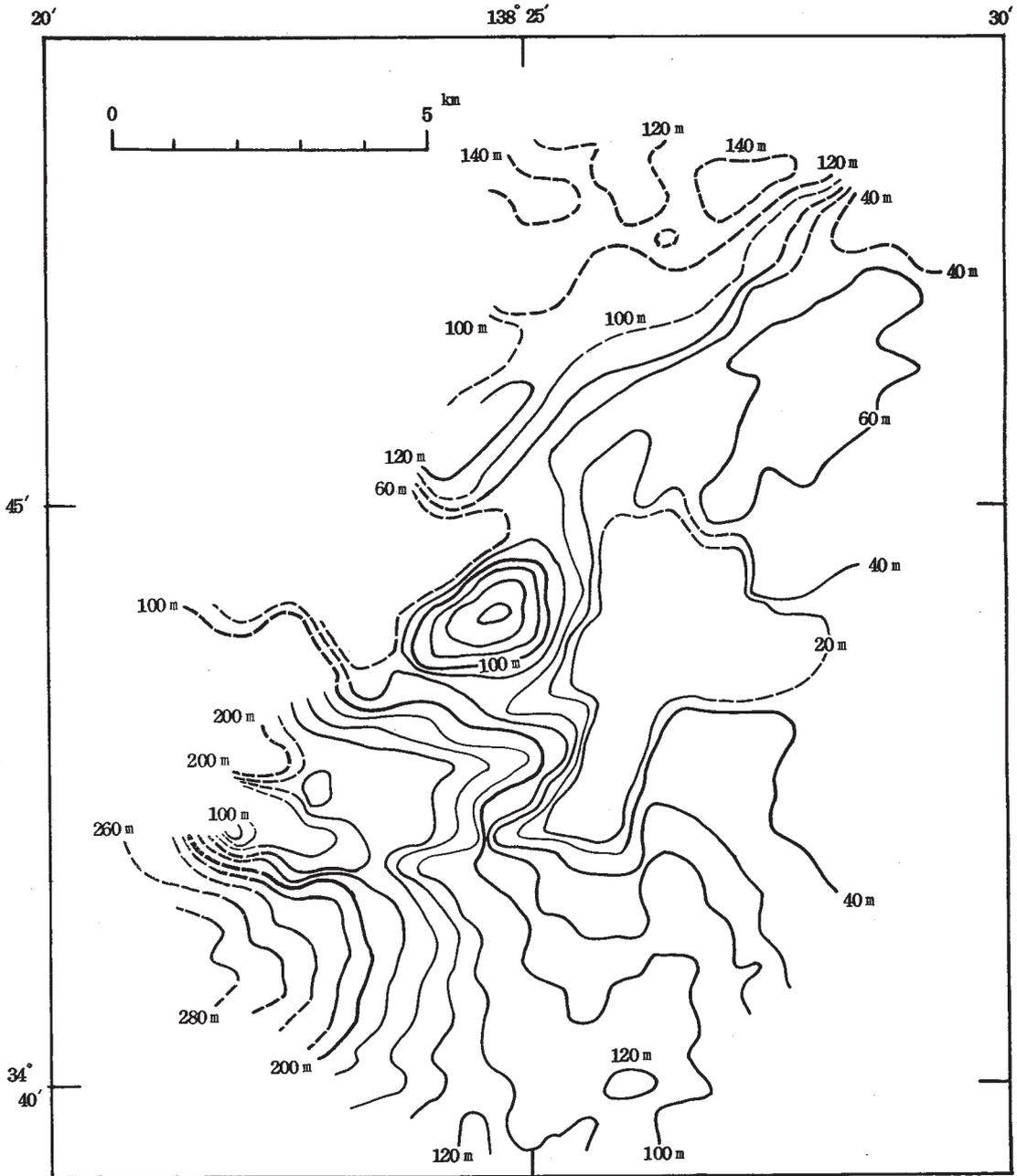


第2図 音波探査プロファイル及び解釈断面  
 Fig. 2 Seismic profile and interpreted section.



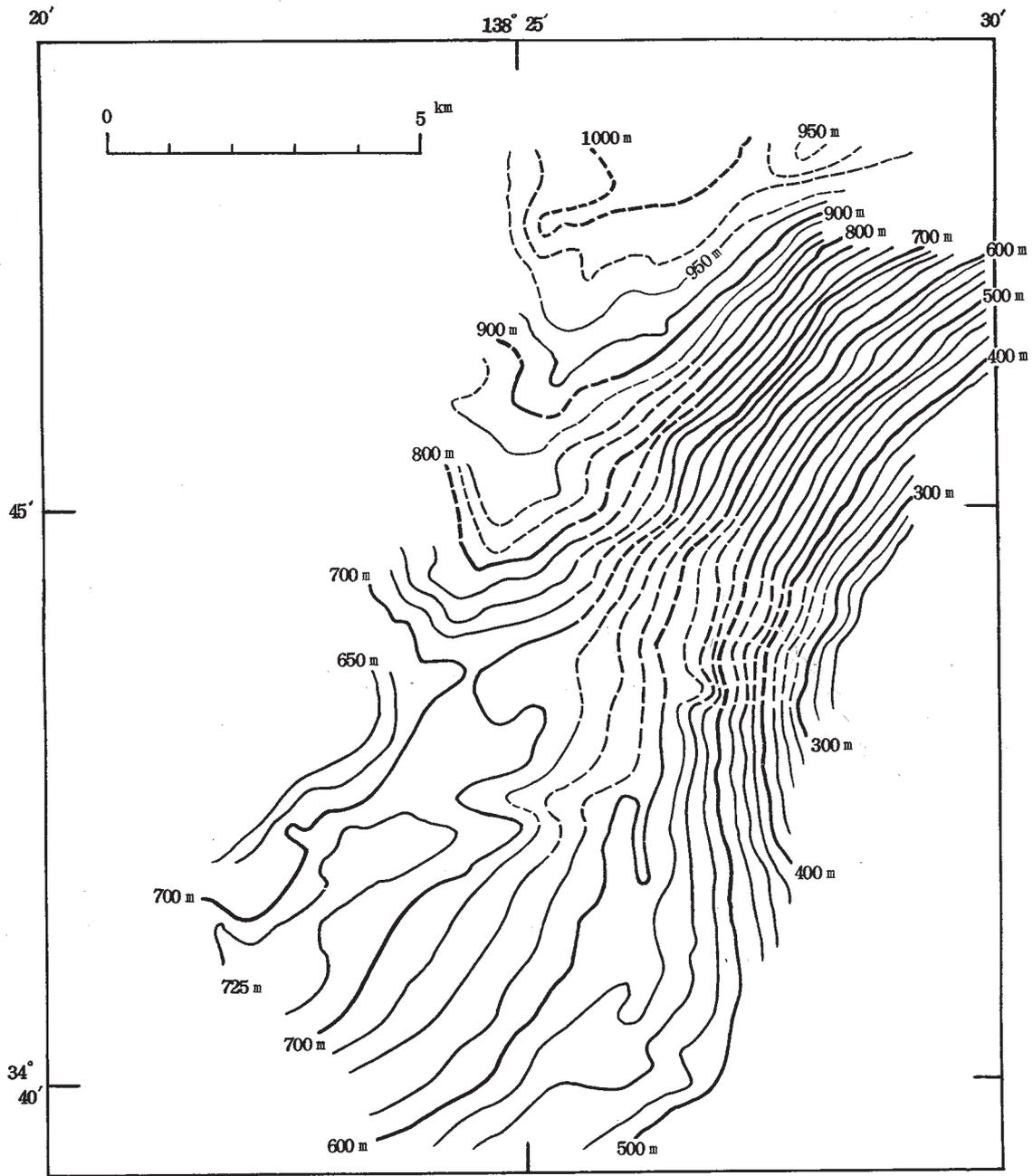
第3図 II層（新第三系上部，掛川層群？）等層厚線図

Fig. 3 Isopach of II layer (upper Neogene, Kakegawa G.?).



第 4 图 I 層 ( 第四系 ) 等層厚線图

Fig. 4 Isopach of I layer (Quaternary).



第5図 I層基底の構造等高線図

Fig. 5 Structural contours for bottom of I layer.